

『夜航詩話』 訳注稿 (10)

道 坂 昭 廣

49・藤納言為家誨学国雅者曰、凡製歌須如構重塔、言先營自下也。蓋一篇精彩全萃於落句、起手則点景耳。故倒行而逆施之也。詩家作絶句、亦須依是法。先就後二句經始、述其主意、預了結局、然後回筆、還及起處、装綴襯帖以成章、則首尾相擊、局勢有余矣。不然其意尽發端、而末梢索然、每苦不足。貂統支吾、不勝蛇足矣。楊仲弘曰、絶句以第三句為主、而第四句發之。是実初学要訣、必先自第三句起工、而結句乃從此生、而韻定、上半因趕韻填詞、為落語作引爾。雖唐賢之作、蓋亦率然也。

権大納言藤原為家は和歌を学ぶ者に「およそ和歌をつくるには、必ず屋根を重ねた塔を作るようにしなければいけない」と教えている。まず下から考えて行くことを言っているのである。思うに（律）詩全体の精彩は尾聯二句に集約されるのであり、出だしは点景にすぎない。それゆえ（常識とは異なり）逆さまになって反対から行うのだ。詩人が絶句を作る場合も、またこの方法によるべきだ。まず（四句のうちの）後の二句から構築を始め、その要となる思いを述べ、あらかじめクライマックスの部分を決めてから、その後で筆を戻して、はじめの地点に返り、装い綴りとりあわせて文章を作れば、最初と最後が対応しあい、全体の勢いも充分なものとなる。そうでなければその意欲は始め二句で尽きてしまい、終わりには寒々としたものになり、いつも不十分さに苦しむことになるのだ。まさに冠の飾りにする貂の毛皮がないからと犬の尾を代わりにして支えようとしても、（後に余分なものを書き加えた）蛇足にも及ばない。楊仲弘は「絶句は第三句を主眼とし、そして第四句はここから出るのである」と言っているのは、実に初学のもの大事な秘訣である。必ずまず第三句から手をつけ、第四句はそこから生まれるようにすれば、韻も決まり、前半二句はその韻に従い言葉を埋めて、終わりの句の序とするだけなのだ。唐の優れた詩人の作品であっても、思うに大体はそのようにして作られたのである。

・藤納言為家 = 1198～1175。藤原定家の子。引用は見つけられない。また、「又云、如人做塔、先從下面大処做起、到末梢自然合尖。若從尖処做、如何得。」と『朱子語類』（巻27・論語九里仁下）にも似た考えが示されている。

- ・倒行而逆施 = 『史記』(伍子胥伝)「吾日暮途遠、故倒行而逆施之」。
- ・経始 = 『詩経』(大雅・靈台)「経始靈台、経之營之」。また 酈道元『水経注』(河水五)「巖側石窟数口、隠跡存焉、而不知誰所経始也」。
- ・装綴襯帖以成章 = 朱子「答張元徳」(『晦菴集』卷62)「今人言語、襯帖替換一兩字、説得古人意思出來」。
- ・局勢有余 = 顔真卿「張長史十二意筆法記」(『顔魯公文集』卷5)「豈不謂趣長聿短、常使意勢有余、点画若不足之謂乎」。
- ・意尽発端 = 劉勰『文心雕竜』(章句)「至於夫惟蓋故者、発端之首唱」また 巖羽『滄浪詩話』(詩法)「発端忌作拳止、收拾貴在出場」。
- 末梢索然 = 杜荀鶴「長安春感」(『全唐詩』卷692)「出京無計住京難、深入東風轉索然」。
- 每苦不足 = 上官均「上哲宗乞復義倉」(『宋名臣奏議』卷107)「倉稟、則每苦不足」。
- ・貂続支吾 = 任昉「為范尚書讓吏部封侯第一表」(『文選』卷38)「華貂深不足之歎」。李善注「趙王倫篡位、時侍中、常侍九十七人。每朝、小人滿庭、貂蟬半坐。時人歌謡曰、貂不足、狗尾続」。また 王士禛『池北偶談』(談猷五・浙江人物)「『西園雜記』論兩浙人物、劉文成為謀臣之首、宋文憲為文臣之首、方正学為忠臣之首、于忠肅為功臣之首。宸濠之變、孫忠烈首輸忠死節、王文成首倡義戡亂、此皆躋也。独謂世宗之初、張羅峰首建議以成大礼、此所謂<貂不足、狗尾続>者耶」。支吾については、『旧五代史』(卷136・僭偽伝三・孟知祥)「知祥慮唐軍驟至、与遂闔兵合、則勢不可支吾」。また、『朱子語類』(卷108・朱子五)「如人病寒下熱薬、少間又變成燥勢。及至病熱下寒薬、少間又變得寒。到得這家計壞了、更支捂不住」。
- ・楊仲弘曰 = 『杜詩詳注』(卷1・「贈李白」(秋來相顧尚飄蓬詩)注)「楊載曰、絶句之法、要婉曲回環、刪蕪就簡、句絶而意不絶、多以第三句為主、四句発之。有実接、有虚接。承接之間、開与合相関、反与正相依、順与逆相応、一呼一吸、宮商自諧。大抵起承二句固難、不過平直敘起為佳。從容承之為是。至如宛轉變化、工夫全在第三句、若於此転變得好、則第四句如使順流舟矣」とあるが、これは、楊載『詩法家数』(絶句)に基づく。『唐音癸籤』(卷3・法微)にも引用されている。
- ・要訣 = 周密『癸辛雜識』(前集・胎息)「此一段要訣、且静心細意、字字研究」。
- ・結句乃從此生 = 翁方綱『杜詩附記』(卷7・泛溪)「吾村異舍接法、安重渾厚、此為風雅之則。登乃豊登意、醪熟句、從此生」。また『唐詩帰』(卷17・盛唐十二・杜甫「前出塞」注)「鍾云、三字妙。亦字悲甚、下二句、從此生」などの例がある。
- ・趕韻填詞 = 『丹鉛総録』(卷2・胸忍辨)に「山海経、太行山、一名五行山。列子作大形、則行本音也。・・・太行蓋趕韻之誤耳」。
- ・率然 = 董仲舒『春秋繁露』(深察名號)「繭有糸而繭非糸也、卵有雛而卵非雛也。比類率然、有何疑焉」。『梁書』(卷52・止足・顧憲之伝)「時刺史王奐新至、唯衡陽独無訟者、乃歎曰、顧衡陽之化至矣。若九郡率然、吾将何事」。

50・宇士新曰、名世之文不在多、而多則伝不広、伝不広、難保不朽。精有数卷、斯足矣。刻詩亦宜爾也。黄魯直晚自刊定其詩、止三百八篇。徐昌国自選迪功集、亦止三百余首、蓋百十選一、以伝諸世。昔人自愛其名如此。欧陽公所謂怕後生笑也。唐人詠蜀葵花云、能共牡丹争幾許、被人嫌処只縁多。夫務精不務多、何但兵而已哉。

宇士新（宇野明霞）は、一世に代表する文集は数が多いということにあるのではない、つまり多ければ広く伝わらなし、広く伝わらなければ時間的に長く伝わることは難しい。精選して数巻あれば、それで充分である」と言っている。詩を出版する際もそのようであるべきだ。黄魯直（黄庭堅）は晩年自分の詩を修訂し、三百八首だけを選んだ。徐昌国も『迪功集』を自分で編集したが、また選んだのは三百余首に留まった。思うに数多くの作品から精選して、それを世に伝えようと考えたのであろう。昔の人が自分の名を大切にすることはこのようであったのである。欧陽公（欧陽修）のいわゆる後の世の人々の笑いを恐れるということである。唐の詩人が蜀葵花を詠じて「能く牡丹と共に争う幾許ぞ、人に嫌わるる処は只だ多きに縁る（牡丹とともにどれくらいかと数を競うが、人に嫌われるのもただその花の数が多いことによる）」。

精選に努めて多くを集めることばかりを求めないというのは、何も軍隊に限ったことではないのだ。

・宇士新曰＝大典「孤雲館遺稿序」（『北禅遺草』巻4）「抑宇先生有言曰、名世之文不在多、而多則伝不広、伝不広、難保不朽。精有数卷斯足矣」。名世という言葉は、『孟子』（公孫丑下）「五百年必有王者興、其間必有名世者」。『朱熹集注』「名世、謂其人德業聞望、可名於一世者」に基づく。

・黄魯直晚自刊定其詩＝王士禛『池北偶談』（巻11・黄徐詩）「黄魯直晚自刊定其詩、止三百八篇。徐昌国自選迪功集、亦止三百餘首。昔人自愛其名如此」。また同人『帯経堂詩話』（巻5）にも同文がある。

・蓋百十選一＝方回『瀛奎律髓』（巻3・懷古類＜劉禹錫・金陵懷古＞）「每讀劉賓客詩、似乎百十選一、以伝諸世者言言精確」。

・欧陽公所謂怕後生笑＝沈作喆『寓簡』（巻8）「欧陽公晚年常自竄定平生所為文、用思甚苦。其夫人止之曰、何自苦如此、当畏先生嗔耶。公笑曰、不畏先生嗔、却怕後生笑」。また俞越は『茶香室四鈔』（巻12・欧陽精審）で宋呂希哲『呂氏襍記』云として、より詳しい話しを引用している。

・唐人詠蜀葵花云＝この詩は、『劉賓客嘉話録』に陳標の詩として引かれて以降、『唐詩紀事』（巻66）（名は陳標）や宋以降の詩話に多く引かれる。しかし東陽は、袁枚『随園詩話』（巻5）「用事如用兵、愈多愈難。以漢高之雄略、而韓信只許其能用十万。可見部勒驅使、談何容易。有梁溪少年作懷古詩、動輒二百韻。子笑曰、子独不見唐人詠蜀葵詩乎。其人請誦之曰、能共牡丹争幾許、被人嫌処只縁多」を意識している。

・務精不務多、何但兵而已＝『資治通鑑』（巻292・後周三）「凡兵務精、不務多」。

51・明葛震甫称徐巢友詩曰、不多作、不苟作、不為応酬之作。又華聞脩自叙其集曰、吾不取

一時之好、冀千百年後有一人知我、千百帙中取其一帙、千百篇中存其一篇。而吾二十余年心血、或藉此一帙一篇以伝、亮哉斯言矣。

明の葛震甫が徐巢友の詩について「多くを作らず、かりそめに作らず、社交の詩を作らなかった」と称賛している。また華聞脩は自分の詩集の序で「私は一時の好尚を取ろうと思わない、千年百年の後にたった一人私のことを知ってくれる人物がいることを願う。数多くの詩集の中からわが詩集を選びとり、数多くの詩のなかにわが一作が伝われば、私の二十年余りの心血をそそいだ文学は、その一詩集その一作によって後世に伝わるであろう」と言ったという。何とも明確な言葉ではないか。

・明葛震甫称徐巢友詩 = 『列朝詩集』(丁集卷 16・徐道士穎)「穎字渭友、改字巢友、海塩人。為諸生、以誣誤逃於僧。自楚歸、入茅山為道士。久之、複出遊江南、燕雒間。好談兵、以徐鴻客・姚榮靖自許。兵後、入閩粵、不知所終。洞庭葛震甫称其詩曰、不多作、不苟作、不為応酬之作」。ほか、『明詩綜』にも載る。

・華聞脩自叙其集 = 『列朝詩集』(丁集卷 16・華秀才淑)「淑字聞修、無錫人。讀書恵山之下、肆力古学、取古人詩与本朝作者、下上揚扨。其詩以清新深婉為宗、雖問津於時人、而能不墮其鬼趣。嘗自敘其詩曰、吾不取一時之好、冀千百年後有一人知我、千百帙中存其一帙、千百篇中存其一篇、而吾二十余年心血、或藉此一帙一篇以伝。噫、聞修已矣、其所謂一帙一篇者、庶其在是乎」。

・亮哉斯言矣 = 『潜夫論』(慎微編 13)「亮哉斯言、可無思乎」。

52・伊藤蘭嶼雖好作詩、未嘗留案。人或言其可惜、曰、苟足以伝者、人其舍諸、否者祇自累耳。即此語足不朽矣。不翅唐山人詩瓢也。

伊藤蘭嶼は詩を作るのが好きであったが、作品を書き留めておくことがなかった。詩を残さないことを惜しいという人がいると、「仮にも後世に伝わるに足るものであれば、人がそれをほっておかないだろう。そうでなければただ自分の心の煩いとなるだけだ」と答えたという。まさにこの言葉は永遠に伝えるべきものである。このような見識は、自作の詩をつめた瓢筆を川に投げ入れ、「伝わるに足るべきものであれば伝われ」といったという唐山人が有名だが、決して彼だけではないのである。

・伊藤蘭嶼 = 伊藤仁斎の五男。1694(元禄 7)~1778(安永 7)。この話しの出典は見つけられない。

・自累 = 『孔叢子』(抗志)「夫清高之節、不以私自累、不以利煩意」。また、韓愈「唐故朝散大夫越州刺史薛公墓志銘」(『韓昌黎集』卷 32)「不応徵举、沈浮閭巷間、不以事自累為貴」。

・此語足不朽矣 = 王世貞『弇州四部稿』(卷 121・文部・書牘)「叙子相如是、是足不朽矣」。

・不翅唐山人詩瓢也 = 『唐才子伝』(卷 10・唐求)「求隱君也。成都人。值三靈改卜、絶念鼎鍾、

放曠踈逸、出處悠然、人多不識。方外物表、是所遊心也。酷耽吟調、氣韻清新、每動奇趣、工而不僻、皆達者之詞。所行覽不出二百里間、無秋毫世慮之想。有所得、即將藁摵為丸、投大瓢中、或成聯片語、不拘短長、數日後足成之。後卧病、投瓢於錦江、望而祝曰、茲瓢儻不淪没、得之者始知吾苦心耳。瓢泛至新渠、有識者見曰、此唐山人詩瓢也。扁舟接之、得詩數十篇。求初未嘗示人、至是方競傳、今行於世。後不知所終」。

53・韋莊詩曰、泉布先生老漸慳、嘆老戒之在欲也。朝野僉載、韋莊性儉、數米而炊、秤薪而爨、少一爨而覺之、一子八歳而卒、妻斂薪以時服、莊剝取以故席裹尸、殯訖、擊其席而歸。其憶念也、嗚咽不自勝、唯慳吝耳。是其於阿堵物、不唯老慳、夙習乃爾、以先生稱、固其宜也。

韋莊の詩に「泉布先生 老いて漸く慳なり（お金は、年を取って次第にしみつたれになってきた）」の句がある。年をとって戒めるべきは欲であることを嘆じている。『朝野僉載』に「韋莊は性格がけちで、米を数え、薪を計って炊いた、肉が一切れ少なくとも気付いた。子どもが八歳で死んだとき、妻は柩に収めるのに普段の服を着せてやったが、韋莊はそれをはぎ取り使い古した筵で屍を包み、葬儀が終わると、その筵をかついで帰った。しかしその子どもを思い起こすと、泣き声を漏らし堪えられなかった。単にけちんぼなだけなのだ」とある。お金に対して、年をとってからけちになったのではなく、もとの性癖なのだ。（お金を）先生と称しているのも、もっともなことである。

・韋莊詩曰＝「江上題所居」（『浣花集』巻5）「故人相別尽朝天、苦竹江頭独閉関。落日乱蟬蕭帝寺、碧雲帰鳥謝家山。青州従事来偏熟、泉布先生老漸慳。不是对花長酩酊、永嘉時代不如間」。『太平広記』（巻165）に『朝野僉載』に出るとして、「<韋莊> 韋莊頗讀書、數米而炊、秤薪而爨。多少一爨而覺之。一子八歳而卒、妻斂以時服。莊剝取、以故席裹尸。殯訖、擊其席而歸。其憶念也、嗚咽不自勝。唯慳吝耳」とある。

・阿堵物＝『世説新語』（規箴）「王夷甫雅尚玄遠、常嫉其婦貪独、口未嘗言錢字。婦欲試之、令婢以錢遶床不得行。夷甫晨起、見錢関行、呼婢曰、拳卻阿堵物」。

不唯老慳＝『宋書』（巻76・王玄謨伝）「劉秀之儉吝、呼為老慳」。

夙習＝『明史』（巻253・王応熊伝）「近日諸臣之病、非臨事不担当之故、乃平時未講求之過也。亦非因循於夙習之故、實愆忘於旧章之過也」。

54・好自高者正其不高之弊、俗眼不脱、故作清態、所謂閉目不窺己、是一種公案、達人随遇而安、悠然忘懷、無境不適也。胡孝轅癸籤曰、韋莊、静極却嫌流水関、閑多翻笑野雲忙、本于老杜之水流心不競、雲在意俱遲、但著一嫌字笑字、覺非真閑真静耳。此誠中窾矣。僧肇有言曰、知惱非惱、則惱亦浄、以浄為浄、則浄亦惱、譏自矜其達非真達也。

自分を高尚な人間であるとしたがる者は、本来高尚でないことの裏返しなのだ。世俗の観点から脱しきれないから、ことさらに清らかな態度を装うのだ。いわゆる<目を閉じて見ないだけ>という、禪の問答のテーマにすぎない。道理に通じた人はその時々に対応して安らかに、悠然として心の煩いを忘れ、どのような境遇にも適応する。胡震亨『唐音癸籤』に「韋莊の詩に<静極りて却って嫌う流水の闇（さわが）しきを、閑多くして翻て笑う野雲の忙しきを（静けさが極まって却ってさらさら流れる水の音さえ騒がしく感じ、のんびりとした時間が多くてかえって野を行くゆったりとした雲さえ忙しく思う>は、杜甫の<水流れて心競わず、雲在り 意俱に遅し（水の流れに心は争う気持ちなく、雲が空にあるが我が心もそれと同じくゆったり）>に基づく。但し<嫌>の字と<笑>の字を付けたために、本当の長閑さ本当の静けさではないように感じさせるのだ」とある。全く的確な指摘である。僧肇は「煩惱が煩惱ではないことが分かれば、煩惱もまた浄化され、浄化を浄化とすれば、浄化も煩惱となる」と言ったという。自分が悟ったということ誇る間は真の悟りではないことを譏ったのである。

- ・好自高者 = 『後漢書』（袁紹伝）「性矜愎自高、短於從善、故至於敗」。
- ・閉目不窺 = 『東軒筆録』（巻12）「馮枢密京、熙寧初、以端明殿學士帥太原、時王左丞安札以池州司戸參軍、掌機宜文字、馮雅相好、因以書託于王平甫曰、并門歌舞妙麗、吾閉目不窺、但日与和甫談禪耳。平甫答曰、所謂禪者、直恐明公未達也。蓋閉目不窺、已是一重公案。馮深伏其言」。
- ・達人隨遇而安 = 『孟子』（盡心下）「若將終身焉」。『（朱熹）集注』「言聖人之心、不以貧賤而有慕於外、不以富貴而有動於中、隨遇而安、無預於己、所性分定故也」。
- ・悠然忘懷 = 蘇軾「吳子野將出家贈以扇山枕屏」（『蘇文忠公詩合注』巻36）「浮游雲釈放、嶠燕坐柳生肘。忘懷紫翠間、相与到白首」。
- ・無境不適也 = 袁枚「戊子中秋遊記」（『小倉山房文集』巻12）「人生百年、無歲不逢節、無境不逢人、而其間可記者、幾何也」。
- ・胡孝轅癸籤 = 『唐音癸籤』（巻11・評彙七）「韋莊詩、静極却嫌流水闇、間多翻笑野雲忙。本於老杜之水流心不競、雲在意俱遲。但多着一嫌字、笑字。覺非真間真静耳」。
- ・韋莊 = 「山墅問題」（『浣花集』巻5）。
- ・老杜之水流心不競 = 「江亭」（『詳注』巻10）。
- ・僧肇有言 = 『焦氏筆乘』（続集巻1・讀中庸）「喜怒哀樂之未發、謂之中者、当喜怒無喜怒、当哀樂無哀樂也。僧肇云、知惱非惱、則惱亦淨。以淨為淨、則淨亦惱。知惱之非淨、即知發為未發、可以触類而通矣」。

55・菊池五山言、六如上人、詩才奇警、寔方外一敵国、然聞其為人、矜情作態、面目可憎、故吾不欲見之、恐十年情恋、一朝灰冷矣。嘗被皆川節齋勸、一往候之、門下以疾辭、五山終以不見為幸云、昔唐宰相鄭畋之女、覽羅隱詩、諷誦不已、畋疑有慕才意、隱貌寝陋、女一日隔簾見之、自是絕不詠其詩。五山於六如、其類於斯歟。然此弊不独六如、率京僧之常態、若

令生見蕉中和尚、其必嘔酸水三斗矣。

菊池五山は「六如上人は、詩才は優れ新鮮で、まことに僧侶中の強敵である。しかしながらその人となりを知ると、驕り高ぶりわざとらしい態度で、その顔つきは憎らしいようだ。それで私は彼に会いたいと思わない、会えば恐らくは十年の恋情も、あっという間に冷え冷えとした心になってしまっただろう。昔皆川笈斎に勧められて、一たび会いに出かけたことがあった。しかし病ということで弟子に面会を断られたが、五山は会わなかったことを終生幸せとした」と言う。昔、唐の宰相鄭畋の娘は、羅隱の詩を見、ずっと口ずさんでいたので、畋はその才能を慕っているのかと思った。羅隱は容貌が醜かった。娘はある日簾ごしに彼を見み、それ以降二度とその詩を詠わなかったという。五山にとって六如も、この類いではないだろうか。しかしこのような悪弊は六如だけでなく、だいたい京都の僧侶の常態である。もし彼に蕉中和尚（大典）に会わせたなら、きっと嘔吐するに違いない。

・菊池五山言 = 『五山堂詩話』(巻1・27)「六如禪師、詩名籠罩一世、人以鉢盂中陸務観称之。余誦其詩、景仰非一日、或伝、師為人矜情作態、見便可憎。余不欲觀面、恐回慕悦之心也。庚申入京、皆川淇園先生勸余往見。時師避疾在一条里宅、因一造之。門下以病見辞。至今以不見為幸矣。」とある。

・奇警 = 趙翼『甌北詩話』(白香山詩一)「中唐詩以韓、孟、元、白為最。韓、孟尚奇警、務言人所不敢言」。

・外一敵国 = 『史記』(游侠伝)「天下騒動、宰相得之、若得一敵国云。『後漢書』(呉漢伝)「帝時遣人觀大司馬何為、還言方修戰攻之具、乃歎曰、呉公差疆人意、隱若一敵国矣」。

・矜情作態 = 『後漢書』(蔡邕伝)「論曰……況国憲倉卒、慮不先図、矜情變容、而罰同邪党」。また、『随園詩話』(巻9)「年家子龔友、青年好学、来誦其白門小住云、秋生黄葉声中雨、人在清溪水上樓。余為嘆賞。臨別、忽向余正色云、友不好名、先生切勿以友詩告人。余雅不喜曰、此予矜情作態、局面太小。已而竟不永年」。

・面目可憎 = 韓愈「送窮文」(『韓昌黎集』巻36)「凡所以使吾面目可憎、語言無味者、皆子之志也」。

・十年情恋 = 『世説新語』(規箴)「漢武帝乳母嘗於外犯事……帝雖才雄心忍、亦深有情恋、乃悽然愍之」。

一朝灰冷 = 蘇軾「送參寥師」(『蘇文忠公詩合注』巻17)「上人学苦空、百念已灰冷」。

・昔唐宰相鄭畋之女 = 『唐詩紀事』(巻69)「為唐相鄭畋、李蔚所知。畋女覽隱詩、諷誦不已。畋疑有慕才意。隱貌寢陋、女一日垂簾窺之、自此絶不詠其詩」。また、『随園詩話』(巻8)「古詩人遭際、有幸不幸焉。唐宰相鄭畋之女、愛誦羅隱詩、後隔簾窺其貌寢、遂終身不復再誦」。

56・鄭谷云、詩無僧字格還卑、又云道著訪僧心且閑。其愛之深矣。然又云、愛僧不愛紫衣僧、蓋貴僧必俗、古今一轍也。

鄭谷の詩に「詩に僧字無ければ格還た卑し（詩の中に＜僧＞の字が無ければ詩の風格はまた低くなる）、また「道に著き僧を訪ぬれば心且つ閑なり（仏道に帰依して僧を訪ねれば心は穏やかだ）」という。その＜僧＞という言葉を受用することが深いのが分かる。しかしまた「僧を受用するも紫衣の僧を受用せず（僧侶を敬愛するが高い身分の僧は尊敬しない）」とも詠う。思うに身分の高い僧侶が必ず俗であることは、今も昔も同じなのであろう。

・鄭谷云＝鄭谷が＜僧＞字を好んだことは、『四庫総目提要』（集部・別集類四・雲台編三卷）「方回『瀛奎律髓』又稱、（鄭）谷詩多用僧字、凡四十余處。谷自有句云、詩無僧字格還卑。此与張端義貴耳」とある。引用の詩は＜自貽＞詩（『全唐詩』卷676）。

・道著訪僧心且閑＝「悶題」詩（『全唐詩』卷675）。

・愛僧不愛紫衣僧＝「寄狄右丞」詩（『全唐詩』卷676）。

・古今一轍也＝『容齋三筆』（卷1・朱崖遷客）「乃知去天万里、身陷九淵、日与死迫、古今一轍也」。

57・六如好声伎、故其詩言酒婦人不一而足、殊失衲子本色、殆与俗同科。錢虞山論僧慧秀詩云、昔人言僧詩忌蔬筍氣、如秀道人者、正惜其無蔬筍氣耳。是詩僧要訓也。侯景数梁太子、吐言止於輕薄、賦詠不出桑中、況於沙門乎。

六如は歌舞の女性を好み、それで酒と女性を詠う詩は一首にとどまらず、まことに袈裟を着る人のあり方を失っており、ほとんど俗人と同じ罪を犯している。錢虞山（兼益）は僧の慧秀の詩を「むかしの人は僧の詩は蔬筍（菜食するいかにも僧侶らしい）の雰囲気を嫌ったが、秀道人は、その蔬筍の気がないのが残念だ」と論じている。これは詩僧の重要な教えである。侯景は「その発言は軽薄なだけで、文学は恋の世界を出ない」と梁の太子をそしった。まして沙門の人ならなおさらだ。

・声伎＝『後漢書』（皇后紀下・陳夫人）「陳夫人者、家本魏郡、少以声伎入孝王宮、得幸、生質帝」。

・不一而足＝『春秋公羊伝』（文公九年）「始有大夫、則何以不氏。許夷狄者、不一而足也」。

・殊失衲子本色＝錢兼益「跋雪浪師書黃庭後」（『牧齋初學集』卷86）「余少習雪浪師、見其御鮮衣、食美食、譚詩顧曲、徙倚竟日、竊疑其失衲子本色」。

・与俗同科＝『竹莊詩話』（卷21・方外・清順・可士）「『西清詩話』云、東坡言、僧詩要無蔬筍氣。固詩人龜鑑。今時誤解、便作世網中語、殊不知本分家風、水辺林下氣象、盖不可無。若尽洗去清拔之韻、使与俗同科、又何足尚」。

・錢虞山論僧慧秀詩云＝『列朝詩集』（閩集卷3・孤松秀上人）「慧秀、字孤松、常熟蔣氏子。……有秀道人集十二卷。上人富於詞藻、采擷六朝、多所沾丐、小賦駢語、時足獻酬、而意象凡近、殊非衲子本色。昔人言、僧詩忌蔬筍氣、如秀道人者、正惜其少蔬筍氣耳」。

・侯景数梁太子＝『資治通鑑』（卷162・梁紀18・武帝太清三年）「（侯）景遂上啓、陳帝十失……」

又曰・ ・ ・ 皇太子珠玉是好。酒色是耽、吐言止於輕薄、賦詠不出桑中」。

58・鍾伯敬云、僧詩有僧詩氣習、僧而必不作僧詩、便有不作僧詩氣習、似是百年前為万菴大潮等道、江北海云、僧詩不可有香火氣、又不可無香火氣、無則害德、有則害詩。簡在有意無意間、真至論也。

鍾伯敬（鍾惺）は「僧の詩には僧の雰囲気がある、僧であって必ず僧の詩を作らないものには、僧の詩の作らないという雰囲気がある」と言う。百年前に万菴や大潮らの為に言ったようだ。江北海は「僧の詩は香火の雰囲気が有ってはならないし、また香火の雰囲気が無くてもならない。無ければ徳を害するものになるし、有れば詩を害することになる」と言った。選ぶべきは意識と無意識の間なのだ。まことに至論である。

・鍾伯敬云 = 『唐詩歸』(卷 32・中唐八・皎然)「鍾云、僧詩有僧詩氣習、僧而必不作僧詩、便有不作僧詩氣習。皎然清淳淹遠、當於詩中求之、不當於僧中求之」。

・江北海云 = 『日本詩史』(卷 5・僧惠仁詩条)「近時學者、動曰、僧詩不可有香火氣。余則曰、僧詩不可有香火氣也。又不可無也。蓋有香火氣、以法害詩、無香火氣、以詩累徳。僧家學詩者、宜了得此義」。

・簡在有意無意間 = 胡應麟「題二王書牘狀」(『少室山房集』卷 106・第跋)「真迹行押之妙、在有意無意間、姿態溢發而行間」。

・真至論也 = 徐幹『中論』(貴言)「或有周乎上哲之至論、通乎大聖之洪業、而好与俗士弁者何也」。袁枚『隨園詩話』(卷 8)「巖滄浪借禪喻詩、所謂鈴羊桂角、香象渡河、有神韻可味、無迹象可尋。此説甚是。然不過詩中一格耳。阮亭奉為至論、馮鈍吟笑為謬談、皆非知詩者」。

